

## Camosun College Lansdowne Campus child Care Center

(短期大学内保育園) 視察訪問

レポート：河野治子

### <概要>

- ・ 短期大学の生徒・スタッフ・職員の子どもを預かっている。まれに一般の子どもを預かっている
- ・ 乳児、幼児に分け、2つの教室で保育している（18か月～36か月の2歳までのクラス7名と3～5歳のクラス16名）
- ・ 24名の子どもを6名の保育者で保育している(障害児が数名いるので専属の保育者がいる)
- ・ 8時から開園

### <方針>

遊びから学ぶ。(子どもたちがその日に何をしたいのか尊重してからの一日のプログラムをたてる)

### <様子>

- ・ 朝会してから戸外遊びを行う。保育は基本戸外遊びが中心で晴れでも雨でも戸外で遊ぶ。
- ・ 現在ビクトリアのトレンドは、スークにあるような”森の学校”を増やすこと。外で遊ぶことを中心とする保育をすすめている。肥満の子どもが増えている傾向があるので、それを回避するために体を動かして遊ぶ”森の学校”が必要とされている。
- ・ 絵本がたくさんあり、絵本は時期により入れ替えている。時期ごとにテーマがあったり、子どもがその時に好きなものを用意している。
- ・ 子どもヨガが流行っていて、子どもヨガの本を見ながらみんなでポーズをとることを楽しんでいる。



<衣類の交換を自由に行える箱>

- ・ テーブルにテーマがあり、子どもが集中して行えるようにしている(コーナーあそびのような感じで粘土やぬりえ等を行っている)
- ・ 行動を絵で示したものが壁に貼ってあり、子どもの言葉(英語)の理解力がそれぞれ違うので、絵を見て行動に移せるようにしている。(障害児や外国の子どもに役立っている)
- ・ 1か月に1回ファミリースタイルの食事(ランチ)の時間を設けている。(各家庭から食材を持ちよって)数か国の子どもが通っているので、食事であったり言葉であったりとかかわりの中で他国の文化を知ることができる。友だちが自分の母国の文化を知って喜ぶ姿を見て自らも喜ぶ姿が見られるとのこと。保護者の方で、母国の絵本を持ってきて子どもたちに読み聞かせをしてあげることがある。
- ・ 短期大学の先生や歯医者を目指す生徒が園に勉強に来たり、保育者が短期大学へ勉強に行くことがある。(短期大学には100のプログラムがあり、原住民の歴史の話や

工芸のプログラムに参加して学ばせてもらっている)

- ・スナック、ランチは持参。

#### <Q & A>

Q、アレルギーの子どもの数は増えているのか。

A、アレルギーの子どもの数は増加傾向にあり、当園でもピーナツアレルギーの子がいるのでピーナツの入っている食材は誰も持ってこないように徹底している。

アレルギー増加の原因として、プロセスフード(加工食品)が影響している。一般的には食べられるが、どうして食べられないのかアレルギーの意味を子どもたちに伝えている。

Q、ファーストフードがすすむ中、スローフードは意識しているのか。

A、食に関しては考えていきたいと思っている。

母親にランチの量や適している物をサンプルしたり、一人ひとり伝えたりと提案・指導している。親と共に食育することを目指している。

#### <感想>

- ① 日本には、大学の付属の幼稚園があり大学や短大の生徒が実習やゼミの研究など保育について学びやすい環境はたくさんあるが、大学・短大に通う生徒がその学校内に子どもを預けられるような保育所的なものがある施設は、あまりないように思う。
- ② カナダでこのような施設が多いのか聞くことができなかったが、このような施設の存在を知るよいきっかけとなった。
- ③ 若年層の母親を支援する団体が主催する保育園もそうだったが、子どもがいるから学校に通えないのではなくて、子育てしながらも安心して自分の勉学にも励めて卒業を目指せるのは、母親の就職

率を高めたり社会復帰につながり良いと思う。

- ④ 日本もこのような保育環境が充実して学生の保護者への保育ニーズが高まっていけばと思う。
- ⑤ 肥満傾向であったり、ファーストフードがすすむ中、保育者の方がそれをどう改善していこうかと日々の保育の中で考え実践しようとしている姿は似ている。保護者に提案してもなかなか伝わらないことが多いが、子どもの将来を見据えて今子どもの成長に関わっている者として子育て支援・保護者支援をしていくことの大切さを改めて実感した。
- ⑥ カナダの良さは、移民者が多いので各国の文化を知れることがあげられる。日本では、外国の子がいると興味を示したりはするが、その子の母国を深く知ろうとしたり学んだりせず、特別な目で見えてしまいがちである。この園のように保護者も積極的に母国の文化を伝えようとする姿があったり、友だちが我が国を知り喜ぶ姿を見て自ら喜ぶことができることは、素晴らしい経験でありとても素敵なことだと思う。このような幼児期の経験があるからこそ、第二外国語教育の盛んさにつながっているのが分かる。乳幼児期の経験・体験は、今後の学習に大きく関わっていくので様々なことを経験のできるような保育に心掛けていきたい。
- ⑦ また、自分の国の良さも感じていけるよう行事を通して、日本の伝統文化を伝承していければと異国の地に来て、さらに強く思うことができた。

